

## P-8 正常有歯顎者における舌骨上筋群およびオトガイ舌筋の硬度の検討

○大楠 弘通、楨原 絵理、渡辺 崇文、鱒見 進一

九歯大・欠損再構築

喉頭の筋、特にオトガイ舌筋は上気道開存性の維持に最も重要な筋で、上気道が陰圧になると収縮して気道を開く働きがあるが、閉塞型睡眠時無呼吸(Obstructive Sleep Apnea: OSA)患者の30%超でこの反応が低下していることがわかっている。今回は、健常者の習慣性閉口位(habitual occlusion:HO)、下顎最前方位(mandibular protrusion position:MPP)、舌前突時(tongue protrusion position:TPP)における舌骨上筋群およびオトガイ舌筋の硬度を測定することとした。

被験者は顎口腔機能に問題を認めない正常有歯顎者で、本学歯学部生および医療従事者の中で研究目的を理解し同意を得た者11名(平均年齢 $26.9 \pm 1.58$ 歳、男性6名女性5名)とした。被験者に水平位を指示し、HO、MPP、TPPの舌骨上筋群およびオトガイ舌筋の硬度を筋硬度計TDM-NA1(佐藤商事、川崎)を用いて測定した。測定順はランダムとした。

本研究は、九州歯科大学研究倫理委員会の承認を得て行った(承認番号:18-28)。

舌骨上筋群およびオトガイ舌筋の硬度はHOとMPPおよびTPP間に有意差が認められたが、女性はHOとMPP間のみ有意差が認められ、HOとTPP間には有意差は認められなかった。

考察

今回の結果より、MPPもTPPもHOより下顎を前方に保持しているものの、女性はTPPには下顎がわずかに開口し舌骨上筋群およびオトガイ舌骨筋が十分に緊張していないためではないかと推察される。今後は更に被験者数を増やすとともにOSA患者との比較検討を行う所存である。

## P-9 社会人基礎力が高い学生の性格特性

○園木 一男<sup>1</sup>、泉 蘭依<sup>2</sup>、高橋由希子<sup>1</sup>、邵 仁浩<sup>1</sup>、中道 敦子<sup>2</sup>、  
日高 勝美<sup>1</sup>、引地 尚子<sup>1</sup>

<sup>1</sup>九歯大・学際教育、<sup>2</sup>九歯大・多職種連携

社会人基礎力は、経済産業省が提唱する「職場や地域社会の中で多様な人々と仕事を行っていく上で必要な能力」である。本学では、口腔保健学科4年生に社会人基礎力診断を受けてもらい、就職活動に活用している。一方、1年次には口腔健診において自記式性格特性検査NEO-FFIを受けている。そこで、4年次の社会人基礎力診断で高いスコアを獲得した学生はどのような性格特性を持っていたのかを検討した。

調査対象は1期生から4期生までの96名(女性95名、男性1名)。NEO-FFIの5つの性格特性Neuroticism(神経症傾向)、Extraversion(外向性)、Openness(開放性)、Agreeableness(調和性)、Conscientiousness(誠実性)のスコアと社会人基礎力の3つの能力(前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力)およびこの3つの能力を構成する12の能力要素のスコアとの相関関係を検討した。また、各性格特性スコアを低い(44点以下)、平均(45以上55以下)、高い(56以上)の3群に分けて、社会人基礎力の各スコアの平均値を比較した。

Opennessのスコアは社会人基礎力の3つの能力のスコアとその総合スコアおよび7つの能力要素のスコアと有意な正の相関関係がみられた。Opennessスコアの3群比較ではスコアが高い群ほど社会人基礎力の3つの能力のスコアおよびその総合スコアの平均値が有意に高かった。また、12の能力要素のうち働きかけ力、傾聴力のスコアの平均値が有意に高かった。

以上より1年次のOpennessスコアが高かった学生は4年次の社会人基礎力が高かった。